

はつかさん

第14号

発行

天津地域振興協議会
総務企画部編集委員会

印刷

米子ワークホーム

境のいぼ地蔵



境集落内、明枝の県道沿いの一角にある竹やぶの中に数個の石碑があるのを御存知でしょうか？

この中に「いぼ地蔵さん」と呼ばれる石像が祀られています。地蔵さんの伝説については、先祖からの二云い伝えで「いぼ地蔵さん」、又は「いぼの神さん」とか言われていました。

昔の子どもにはよくイボが発生したものです。地元の人々に、「いぼ地蔵さんにイボがとれるようにお願いしたら」と言われて行ったところ、数日後に治り消えてい

ました。(実際には、祈る時花立ての水を二〜三滴イボに付けてお願いした) 誠によく効き目がありました。

最近の子どもにはイボがあまり出ず、また出た時はお医者さんに掛かり治すようになりました。そうしたことからは、いぼ地蔵伝説は何十年も忘れ去られ、現在では祈願する人もなく、竹やぶの中にひっそりと佇んでいます。

今では、民間話話から語り継がれた、昔話にしか感じることができません。

(平成十一年八月発行)

館報あまつ六六号より)



また、地元でもあまり知られていないこんな説話があります。

「会見郡札所めぐり」の一説に、境集落内、観音堂への上がり口の道路反対側にある竹やぶの中に、『目の神さん』と呼ばれる石造物がある。

これは、黒っぽい石に不道明王が浮き彫りにされていて、不思議なことには目が白い蓋のようなもので覆ってある。大正の初め頃までは川向こうにあったそうだが、河川改良や道路修繕の為現在の所に移されたようです。地元でもここに目の神さんが祀られていることを知っている人は少なくなっています。と書かれています。

現在、「目の神さん」と呼ばれていた地蔵さんの事を知る人はなく、「いぼ地蔵さん」が昔「目の神さん」の愛称で呼ばれていたのか、又は他に地蔵さんがあったのかは分かりませんでした。

いぼなおし地蔵



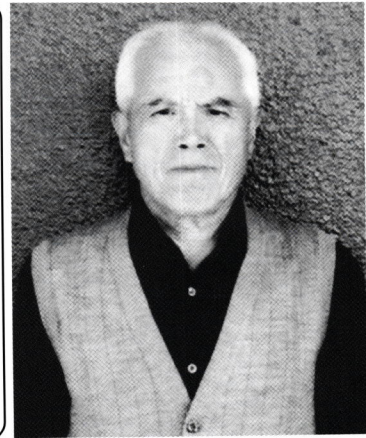
全国各地に「いぼ地蔵」にまつわる云い伝えがある。

イボとは、皮膚にできる丸い小突起物の事である。一種の皮膚病で、現代では病院に行ったり、ハトムギを煎じて飲んだりして簡単に治すことができるのだが、治療薬が発見されなかった昔は、一つできると次々に数が増え、なかなか治りにくい頑固な出来物だった。痛みはないが、気味の悪い厄介な皮膚病とされ恐れられていた。

昔の人は、イボに限らず治りにくい病気にかかると、神仏への祈禱やまじないをやれば治ると信じていたので、地蔵尊や薬師如来像を祀って祈願する風習が広く各地に普及した。「とげぬき地蔵」や「夜泣き地蔵」「脚気地蔵」などもその例である。

地蔵はあの世とこの世の境にあって、冥土に赴く者を救うとされていたが、現世の人々の苦悩を救ってくれるとも云われていたので、こうした地蔵を祈願する風習が全国に広がった。

あの人
この人



小説で鳥取県文芸賞奨励賞を受賞
されました四季の大泉 英夫さん

自己陶酔の登山記録

手元に登山記録がある。A―5判、厚さ4cm、昭和三十二年十二月発行、定価三百五十円である。(週刊誌三十円の時代) 仕事に就いて日もまだ浅く、薄給の身には、狂気とも言える高値の華であった。どんな気持ちで手にしたか、今もって不明である。日記は三十年で二冊目にバトンタッチしたが、それも既に二十五年になった。いやはや、この長き記録には、自己陶酔も中途半端ではない。内容的には震撼させられる大事故もあり、悲喜こもごもである。
劔岳では雪渓を滑落して、岩に激突、大きなリュック(35キの装備)に命を守られた。

大阪の天王山では雀蜂に二十数ヶ所も刺されたが、辛くも無事を貫った。それでも登山への気持ちが萎えなかったのは、山が好きの一語であろうか。

思えば今の私、余禄の人生か? Uターンして「低山を登る会」を立ち上げて十年になる。会員の出入りはあったが、例会は、ほぼ毎月実行されて、六月には百回記念を那岐山で祝った。

さて冬の到来である。会では冬眠などしない。登りたい人、この指たかれ。(大泉 英夫)



大山の頂上にて

なお、大泉さんの小説は、十二月四日から各書店で販売しています。
興味のある方はぜひご覧ください。

清水川いきいきサロン紹介
しみず会



花回廊で記念撮影



毎年恒例 しめ縄づくり

いきいきサロン『しみず会』は平成十三年、会員二十名で発足しましたが、現在わずか十名となり皆さん後期高齢者です。

元氣いっぱい生きるための心構えや知恵を学び、人生を健やかにする習慣を身につけるため年間を通じ次のような活動をしています。

① 私たちの村を語る。

- (地名の由来、屋号、古事記清水井など)。
- ② 有識者を交えた勉強会。
- ③ 町外へお出かけ研修会。
- ④ 南部町ふれあいバスや緑水園バスを利用して、町内の未知の集落巡回。
- ⑤ ビデオ、DVD鑑賞。
- ⑥ 正月締め縄づくり(会員外も参加)。
- ⑦ 室内で軽スポーツ。
- ⑧ 公民館障子張替え、屋内外の掃除。
- ⑨ 点取りゲーム(景品付き)。
- ⑩ その他会員の要望。

清水川は人口九十五名、その人口の45%が六十歳以上という少子高齢化集落、サロンしみず会の会員も加齢、病弱などの退会による自然現象は避けられません。そのような現状がいつまで続くのかそんな危機感を絶えず意識しています。
(世話人代表 大塚 明夫)

山の中の史跡

昔の子どもは、よく山中に入り色々な経験をしていたと思いますが、今は本人にとって入る必要がない、親が入らせないなど、今後どんどん山に入ることにはなくなっていくと思われまます。

そこで、平成二十三年十一月三日の文化の日、よく晴れて山歩きに絶好の天候の中、六人の有志で上阿賀の山中の史跡を確認しに行きました。

まずは、山に入ってすぐにある阿賀神社跡。西伯町誌の九十四ページには中近世の部落信仰が掲載されており、上阿賀は王子が記載されています。阿賀神社はこの王子権現を祀っており、阿賀神社のあった場所は小字名が王子塔山です。大正六年（一九一七）四月に倭の賀茂神社に合祀され、今では建物はなくその石垣しか残っています。



阿賀神社跡

小谷山を過ぎ、医者山付近にある一つ目の高圧送電線の鉄塔下で少し休憩し、後産墓へ。今では何もない平らな土地でした。



後産墓

二つ目の高圧送電線の鉄塔を指し尾根にたどり着くと反対側には法勝寺の新宮谷が広がっていました。鉄塔を横切り百メートルくらいのところ、救命山にある木野山さんに到着。木野山さんは、明治九年を皮切りに中国地方に猛威をふるったコレラ病に格別のご神威の発揚があった岡山県の木野山神社から、明治十年頃、秦富藏さん（秦壽昭さんより五代前）が勧請して帰られ、始めは下阿賀の地内に祀られていたのを、後に救命山頂に祀り替えされ、昭和四十年の前半頃まで、毎年四月十六日に宮司ともども両阿賀より人が山に登り、籠もりを行っていました。



木野山さん

救命山から引き返し、じんむさんの穴へ。じんむさんの穴は、昔大国の原集落の竹本さんが籠ったと伝えられています。今では、籠ったと言われる穴も崩れてしまっています。



じんむさん穴

最後に、行者さんに向かいました。行者信仰は、江戸時代以前のもので山岳信仰に天台宗・真言宗の密教的要素が習合したものです。上阿賀の行者さんは大小様々な岩の祠に石像が祀っており、戦前までは両阿賀の人々が山に籠り、行者信仰が行われていたと聞きます。現在でも石像の近くには、当時祭式が行われていたと思われる広場の跡がその名残として残っています。



役の行者



この山の中の史跡が忘れ去られないように、伝えて行きたいと思っています。（上阿賀 渡邊 悦朗）